

沖縄から見た台湾有事の議論の問題点

琉球大学人文社会学部准教授 山本 章子



- * 偏っている台湾有事を巡る議論
- * 日本が知るべきポーランドの対応
- * 一面的で現実感覚が乏しい与野党の主張
- * 重要影響事態と沖縄の現実
- * 実態と整合しない安保3文書
- * 住民避難が後回しにされる法体系
- * 日米地位協定と自治体や住民も抵抗
- * 円滑な避難、軍事行動が不可能な現実
- * 空港の管制権に強い影響力持つ米軍
- * 首都圏からの一方的な視点に修正を

山縣 それでは開会いたします。（拍手）

本日は、琉球大学で人文社会学部の准教授とされています山本章子先生に、沖縄から今朝、子供さんと一緒に来ていただきました。先生は、ご案内のとおり2020年、第41回石橋湛山賞の受賞者でいらつしやつて、受賞されたのは『日米地位協定 在日米軍と「同盟」の70年』という2019年に刊行されたご本でした。ただその後、皆さんもご承知のようにコロナで緊急事態宣言が起りまして、本当は受賞された方はすぐ講演をさせていただくんですけども、コロナに阻まれてしまいました。予定された講演会ができないということになりました。そういう意味では、ようやく本日先生のお話が聞けるようになったということでありませう。

先生は最近共著で岩波新書で『日米地位協定の現場を行く——「基地のある街」の現実』という本を書いておられます。推測するに、おそらくこの湛山賞を受賞された作品のさらに一歩踏み込んだ続編としてこういうものを出されているのだと思います。

今週は先生に「沖縄から見た台湾有事の議論の問題点」というお話を伺い、来週は國分先生に少し大きな視点から、米中の関係の中の台湾の問題を、おそらく多く言及されると思います。そういう意味では、今日の講演会と来週の講演会を通して、ミクロとマクロで東アジア情勢の理解が深まるのではないかと考えております。それでは先生、よろしくお願いいたします。（拍手）